

幼児の吃音について

権平俊子

吃音の原因

吃音の原因は、昔からいろいろ考えられていますが、これであると簡単にいいきることは大へんむずかしいことだと思います。

多くの人は子どもが吃っている様子をみて身体的に或いは知能的に変わっているのではないかと思われるかもしれません。しかし、先ずこのような心配はありません。吃音は言語器管の構造的な欠陥や、筋肉の異常から起こるものでもなく、低い知能のためでもあ

吃音が始まる年齢は、学者によりいろいろいわれていますが、大体六五パーセントが三才前、八十パーセントが八才以前です。これからみて、言語発達と社会生活の適応とに深い関係がある年齢に、一番多く吃り始めることができます。また、男は女より多く、男四人に対し、女は一人の割合位です。

一つの幼稚園に、人や人は吃る子どもがいます。特に吃り始めたときの抜い方は、その子どもの吃音の成り行きを決定してしまうといってもよいでしょう。そのため、この時期の家庭や幼稚園での抜い方が一番重要になるわけです。

りません。また極めて稀な場合を除いては、病気でもありません（てんかん性の吃音があります）。今まで、吃音は遺伝するものだと思います。これには、はっきりした根拠はないようです。周囲に吃る人がいて、その真似をしてなるのだともいわれてきました。こういう例も確かにあります。しかしよく考えてみますと、幼い子どもはよく吃りの真似をするものですが、その中で吃音になるのは極く一部分の者だけなのです。だから模倣によってなるということは否定できるように思います。無理な利き手の矯正により吃音になるという説もあります。しかし最近これは疑われ

てきました。私は利き手の矯正方法に原因があるのではないかと思
います。かなり強度の左利きを子どもが嫌がるのを無理矢理に矯正
しようとすること、例えば「またそっちの手を使った」というよう
に口やかましく注意すると、子どもが心の安定を失ってしまうの
は当然でしょう。人は誰れでも、あわてたり、怒ったり、緊張した
り、興奮したときに、話しがつまったり、とまどったり、繰り返し
たりする傾向があります。子どもも、感情的に緊張した場合に吃音
が始まり、強くなるということができません。非常に強いショックを
受けたとか、強い嫉妬を起しているとか、安定感があたえられてい
ないとか、感情的に緊張する原因はいろいろありますが、おとなが
何気なく考え、していることが、子どもにとつてかなりの負担にな
っていることが意外に多いものなので、その点充分に注意したいも
のです。

子どもの精神発達の過程において、話したいという欲求と、表現
する能力の発達との間にずれが生じやすい時期、即ち三才から五才
頃に吃り始まることが多いようです。子どもの吃音も、おとなのそ
れと同様に感情的に緊張したときや、発言したいという欲求が高ま
った場合に、即ち、いろいろなことを急いで話して聞かせたいよう
なときに吃ります。子どもの吃音の特徴だとはいいきれませんが、
表現したいという欲求と、吃音とは関係があるように思えます。

家庭内の不和、家庭内での争いは、どんな子どもにとつても望ま
しいことではありませんが、特に吃音の子どものとつては禁物で

す。口喧しく言い合ったり、争いの雰囲気の中で生活するのでは、
誰れでもくつろいだ、のんびりした気持にはなれません。平和な家
庭こそ子どものいろいろな問題をなくす上に、大切な場所だと思
います。子どものした仕事や、作品勉強に対して批判することも、子
どもの自信をなくしたり、不安になったりするので、吃音にはよい
影響を与えません。周囲のおとながそのときの感情や家族内の人に
より子どもの同じ行為や発言を、あるときはほめ、あるときは叱つ
たりすると、絶えず人の顔をうかがって、ひやひやしながら発言
するために、その際感情的に緊張して吃音が始まったり、ひどくな
ることがあります。同胞があるときには、親が意識しなくても、或
る子どもの面倒はかりみているようなことがあれば、子どもが不満
を感じて吃音にはよくありません。また余り何時までも赤ん坊扱い
にし過ぎ、一人でやりたいという気持を妨げたり、自由に遊び廻り
たいという気持を押えついたり、年令以上のしつけをしたり、知識
を教え込んだりなどすると、精神的な緊張を増し、吃りが始まった
り、ひどくなったりした例があります。

吃音の子どもの扱い方

これまで話してきましたように、吃音の原因は複雑なものなので
す。それでは子どもが吃り始めたら、どのように扱ったらよいでし
ょうか。

第一に大切なことは、子どもが吃って話していても、絶対に叱って
はならないことです。叱ることは吃りを治すのに効果がないばかり

か、自分が吃るということに恐怖や不安を生ずる結果になり、却って精神的に緊張を起こして、吃りがますますひどくなります。また吃るのではなくても、「ゆっくり落ちついて話しをしないね」、「吃らないように話すんですよ」、「さあもう一度、吃らないように言っごらんなさい。」「一と息吸ってから話してごらんなさい。」「吃らないでも話せるときもあるのに、どうしてそんなに吃るんでしょうね。ゆっくり話すようにしなさい。」などと心配のあまり注意を与えることは、話すということに対して、子どもの緊張を増し吃りを軽くする結果にはならず、ますますひどくなるばかりです。大部分の吃音の人は、人に話しかけたり、答えるのでなくて、独り言のときなどには、すらすらと話せるものなのです。そして、大勢の人の前で話すとか、始めての人に話しをするような、緊張するような場面で話すときに、ひどく吃るのが普通です。そこで吃音を軽くし、治すのに一番大切なことは、子ども自身に吃りであることを忘れさせることです。また周囲の人たちも子どもが吃るということをできるだけ忘れ、気にかけないように心掛け、ゆっくりと、気ながに聞いてやるのが何より大切です。周りの者が子どもの吃っているのを聞いてあせったり、気の毒に思い、こういうことを言いたいのだと気がついて、代りに先に言ってやることは、子どもの気持をいらいらせたり、話すことの自信を失わせる結果になるので禁物です。子どもに誰れかが質問したときには、いくら吃っても子ども自身に答えさせましょう。吃りの子どもを持つ多くの御両親は、吃る

子どもに代って答えてやりたくないので、しかしそうすることによって、子どもの話す自信をたんだんに失っていく結果になってしまいます。そこで、子どもの話し方が気になり、恥をかくのではないかと心配になってきても、黙って話すことの責任を子どもに持たせるようにすることが大切です。幼稚園や小学校における吃音児の扱い方も同様で、一人ずつ順番に話をさせるようなときには、吃りの子どもを、吃ったらかわいそうだと思ひ、とはしてしまふことは絶対に避けるべきです。自分だけ指名されないことは、子どもの誇りを傷つける結果になるばかりか、話そうとする意欲を失うようになる恐れがあります。また同級の友人もその子の話し方がおかしいから先生が話させないのだなと考へてしまいます。

子どもが吃り始めたときの周囲の扱い方により、その子どもの吃音の成りゆきを支配するといつても過言ではありません。したがってこの時期の扱い方が一番大切ということになります。吃音をはずかしいこと、吃ることによって、人間全体の価値が低くなつてしまふように周囲の者も考へ、また子ども自身に思ひ込ませてしまつては、吃ることを怖れ、また吃るのではないかと話すたびに気にするようになり、却って吃りがはげしくなつてきます。そればかりか話しことばに対して劣等感を持つてしまふだけでなく、他の行動面においていろいろな困つた問題を起こす原因になります。そこで子どもがこころしく前から吃り出したような初期の場合、すなわち、話すことを逃避したり、吃りはしないかという恐怖心を起こし

ていないうちには、今までお話したことでお解りいただいたと思いますが、吃りを自覚させないことが何よりもよい治療法なのです。そのため、昔から行なわれてきた、いわゆる吃音矯正の発声練習は、却って吃音を意識するようになり、幼児期の初期吃音には、よい結果を得られないことが多いようです。そこで、こういう初期の吃音の子どもには、吃音そのものを矯正はしないで、吃音が発生した背景にある子どもの心理的な問題について考えてみる必要があると思います。そのため、何よりも先に信用できる心理学的臨床家に相談され、その原因を探究し、処置をこうすることがたいせつです。私たちは、幼児の吃音の場合、母親と面接し、子どもには知能テスト、及び心理テスト、遊戯面接を行なうなどして、その原因を探究することに努めます。

その原因が不適応にもとづくものであると思われるときには、母親といろいろ話し合い、落ちついた明るい雰囲気をつくり出すことによつて、子どもの吃りを治すことができた経験をいくつか持っております。しかし、環境や扱い方の改善を実行するには、周囲の方の深い理解と、努力があつてこそ成功するものだと思います。そのために、御両親並びに祖父母や他の家族の方々、そして幼稚園、小学校の先生方の御協力により、子どもの吃音を是非初期のうちに治しておきたいものです。

私の研究所におきましては、昭和二十九年より吃音児に対してグループ・サイコセラピー（集団心理療法）及びブレイ・セラピー

（遊戯療法）を行なったり、母親のカウンセリングを通じて子どもの欲求不満を解消して、社会的不適応から、社会生活に適応するよう努めてきました。これにより吃りも自然に治ってまいりました。

吃音の子どもと話すときには、ゆっくりとのんびりした気持ちで話しをし、子どもが話す機会をつくつてやるように努めます。人形とか動物などに話しかけることは、子どもが吃らないという自信をつける大へんよいきっかけになることがあります。犬や猫、兎や小鳥などを飼ひ子ども自身にてきるだけ、その世話をさせるのも、いろいろな点で効果があります。

もし、その原因が表現欲求と表現能力との不釣合になるときは、一方では表現能力の向上と、他方では表現欲求の不充分から生ずる緊張を解消する必要があります。話をのんびり聞いてやり、絶対に一しよにせきたてないようにすることが大切です。自己表現は話すことだけによつてなされるものではありません。作文、画、フィッガー・ペンテング、積木、人形遊び、音楽、遊戯、などによつても表現できるものなのです。これらのうち子どもの真味のあるものを選び、緊張のはけ口を作つてやるようにするのも、一つの方法です。年齢が長じて、吃り始めてからかなりの年月がたつてしまつていると、話しことはが吃るように習慣化されてしまつていることがしばしばあります。このような場合には、環境の調整や、心理療法だけでは吃音は治らず、発声の練習を併用しなければならなくなつた

り、話すことに抵抗を感じて、話しをしなくなってしまい、治療がむずかしくなります。しかしこうなってしまうと、諦めてしまわずに、一日も早く専門家に相談されて、適当な治療法を行ない、治りうるという自信のもとに、本人も、周囲の者も努力してゆき、一人で悩むことのないようにしたいものです。

現在まで、数多くの吃音児の治療を行なってきました。次に一例をお話してみましよう。

三才五か月、男児

〔家族〕実父 三十六才 縫製業、大学卒、実母 三十才 短大

卒、姉 八才 区立小学校二年生、兄 一才半 事故死、

使用人 女五名 二十五才から十八才

〔生育歴〕熟産、生下時体重 三・五〇g、歩き始め 一才、か

一月、話し始め 八か月

既往症 風邪は引きやすいが大病はしない。

吃音の状態 一か月前から、話し始めの語を何回もいうようにな

った。気になったので、ゆっくり口うように注意したが、

ちっともよくならない

その他の問題行動 新しいところに行くとなれにくくすぐ泣く

指を絶えず口に入れている

〔経過〕 吃りがひどくなるので心配になっていたところ、クラ

ス会で友人の子どもの吃音が当相談所に通い治ったことを聞き、来所した。先ず知能テストを行なった。そのときの様子は母親から離

れず、始めテストになかなか応じなかったが、馴れてくるとよく応じた。知能指数は、一八、吃音の状態は非常にけししく、連発・難発の混合型、話している内容が聞きとり難い程であった。

母親と面接を行ない子どもの扱い方などを聞いてみた。本児の兄は母親のちよつと油断している間に二階の出窓の下すりを乗り越えて、道路に落ちて、頭蓋骨骨折で入院。週間後に死亡した。その子に対して、申しわけないと思ひ続け、もう子どもを持つのが恐しくなつた。本児を妊娠したときも、七か月でやつと診察を受けた程だつた。だんだんに子どもが成長するにつれて、またげがでもさせては大へんだと思うと、外に出すのがこわくてこわくて仕方がなくなり、子どもが、一人で動けるようになって、危いと思うと距離す氣持に全くなれず、行動を制限してきた。始めのうちには、母親にかくられて外に出ようとしたが、そのうちあきらめたようて、母親のそばから離れないようになり、新しいところに連れていくとその状態はなおひどくなった。母親とよく話し合ひ、子どもというのは活動的であり、自由に行動させることが必要なことを述べた。母親は徐々に子どもの扱いに対する自信を取り戻し、友たちを家に迎え入れて遊ばせるようになった。思ひきって幼稚園にも入園させた。初めは母親から離れなかつたが、幼稚園側の温い受け入れて、母親から自然に離し、友だちと元気に遊ぶようになる。吃音の方もだんだんに少なくなり、半年程で完全に治り、三年余経過した現在、元気に小学校に通学している。吃音の再発もない。

（愛育研究所）